

『造化元鑰』

徐樂吾評註

『造化元鑰』は、清代末から近代にかけて活躍した徐樂吾氏が、本書の評註を出刊したおかげで、現在にも広く伝えられることとなった書です。

本書は、もともとは『欄江網』という書であり、『窮通宝鑑』という別名の書も、同じく『欄江網』を元としていることが知られており、いずれも徐樂吾氏が評註を出刊しています。

つまり『造化元鑰』と『窮通宝鑑』は基本的には同じ書なのですが、現在手に入れることができる二書を比較すると、『造化元鑰』にある「五行総論」の冒頭の部分が『窮通寶鑑』にはなぜか欠けています。

一方、『窮通宝鑑』には、干と四季の関わりの説明の始めに、そのあと説明されている内容をまとめた表がありますが、『造化元鑰』にはそれがありません。この表の名称は「調候用神表」といわれ、節月ごとの日干と他の干とのかわりの宜忌がまとめられているのですが、実証的にまったく無意味と言えます。その表には「丁火鍛金」「庚金劈甲引丁」などであり、丁火を炉火とし、庚金を刀剣として、それがたとえであることを忘れ、十干の本質であるかのように誤解して論を展開しているのです。十干については、本コーナーの『滴天髓』の十干論を参照してください。

なお『造化元鑰』と『窮通宝鑑』のこうした内容の違いは、編集上の問題だけなのかもしれないませんが、この違いが発生したいきさつの詳細については不明です。

最後に、本書の書名について説明しておきます。

造化 ゾウカ … 自然を支配する道理。 天地。 自然。

元鑰 ゲンヤク … 「元」は 形容詞・名詞 もとの、 もとのもの、 はじめ、 の意であり、「鑰」は、物事の重要な部分、かぎ、錠、かなめ、の意であることから、『造化元鑰』の書名の意は、「自然を支配する道理の、おおもとなるかなめ」ということになります。

「五行総論」は長いため、このファイル(1)とし、いくつかに分けることとなります。

五行總論(1)

五行者。性本乎天地之間不窮者也。是故謂之行。

《五行は、性もと天地の間にて窮まらず。「これゆえこれ行という。》

者… 助詞 上の文句を「それは」と提示することば。 … は… とは。 /文末につけて命令の語気を

表わす言葉。 明代、清代の俗語。

性… 名詞 中にひそむもの。 外形のもとになるもの。 /形容詞、副詞につけて、その状態を示す助辞。

乎 … 助詞 場所や比較を表わす助辞。に。より。

本… 副詞 もと。もともと。

【解説】

四柱推命学を成り立たせている最も基本的な考え方である五行とは何か？ その本質は春夏秋冬の季節の巡りそのものであり、季節は、太陽と地球の位置関係から生じるものであるから、五行は、太陽に象徴される「天」と、地球に象徴される「地」の間を循環し、窮まることのないものであるといっているのです。そして、とどまることなく巡るゆえ、「行」には、「行る^{めぐ}」の意があることから、五行といっているのであるといっているのです。

ただここで忘れてはならないのは、五行が天地の間を巡るとしても、その影響を受け、それを認識できるのは、ただ人だけであるということなのです。逆に言うなら、春夏秋冬の巡りが人にどのような影響を与えるかを知るには、五行の作用をつまびらかにする必要があります。ということになるのです。

財官食印等八神名稱。古人手提網挈領。以示初學。所以便於論休咎也。如論生剋。五行各有所宜。性質不同。未可概論。言財官食印。不如逕言五行之爲便。故本書專論五行。不言八神。四時氣候。古人代之以卦。名曰卦氣。至漢代。始易以五行。生剋。及印比官鬼等命稱。卦氣合氣候方位言。今論五行。亦宜會其意也。

以五行代春夏秋冬之名稱。配合方位。出於天然。北方亥子丑。冬季也。南方巳午未。夏季也。当方寅卯辰。春令也。西方申酉戌。秋令也。冬季陰寒爲水。夏季陽熱爲火。春令陽和散泄爲木。秋令寒肅收斂爲金。土無專位。居中央而寄四隅。四隅者。艮巽坤乾。即四季交脫之際也。

春夏之交。木氣未盡。火氣已至。間雜之氣名也屬土。如統一年而論土。至午未月爲最旺。亦居中央之意也。順序相生。所以相維。故循環而不斷。隔位相剋。所以相制。故盛極則衰。否極則泰。無往不復。天之道也。倫者常也。言有一定之程序也。

由五行之性質而推其用。水性流動。其象爲智。火性光明。其象爲禮。木性陽和。其象爲仁。金性嚴肅。其性爲義。土性渾厚。則近於信。以五行配五常。有此象徵。